山中啓子、『世紀末パリに暮らす』、読売新聞社、260 p、1999 年、1600 円

西山教行（経済学部）

フランスでの滞在記や旅行記の類は、永井荷風の『ふらんす物語』に始まり、類書は際限なく再生産されている。その多くはステレオタイプの繰り返しであったり、フランスへの熱烈な思いを切々とつづったものだったり、読者としていささか食傷気味になってしまうものも多い。本書の著者はフランス社会の日常から政治、宗教まで多彩な現象を取り上げ、単なる東西文化の比較や個人的な印象に満足していない。内容は主に日本経済新聞に掲載された記事を中心とするもので、正確な統計や資料に当たるなど、ジャーナリズムの良心に忠実である。目次をみれば、「東と西、慣習の違い」、「各界トップ・インタビュー」、「フランスに“ないもの”３つ」（みなさん何を想像されますか？）、「変わりゆく家族の形」、「野心はもう男性だけのものではない」、「カトリックの国フランスで」、「ワインを手なずけるには」「失われた時を求めて」、「エッフェル塔と 2000 年」とトピックも硬軟を取り交えている。なかでも女性の社会進出に関する件は興味深い。クレソン内閣（1991-92 年）の女性閣僚(ロワイヤル環境相、ブルダン青少年・スポーツ相)の出産を取り上げて、フランス社会の中で家庭生活を犠牲にせずに、野心を実現する女性像を示している。現在も選挙における男女候補者同数法案（パリテ）を可決するなど、政治においてフランスは女性の権利を主張するが、政界への女性進出は単なる飾りではない。現在もオーブリー雇用大臣の大活躍に代表されるように、その社会進出は実質を伴っている。フランス社会の現在を読み解く好著である。